

なでしこ

池松 孝子

なでしこは我が国原産の植物だ。花の姿が撫でたくなるほど愛おしいということからその名がついたと言われる。花弁は五枚で、縁は細く裂けている。優しいピンクの花が多い。風になびく様はなかなか風情がある。私の故郷では、河原や土手の石の隙間から立ち上がり風にゆらゆらとそよぐなでしこをよく目にした。か弱い印象もあるが、茎を折って挿し木にすると、意外と簡単に根を下ろすとも聞いた。河原で立ち上がる姿に、ある種の生命力を感じたのはそのせいかもしれない。可憐な姿でもあり、また健気な印象の花でもある。先日、故郷の友人がその河原へ、毎年目にするなでしこを見に行くというメールがあった。約束の写真を楽しみにして待っていたが、河原の大掛かりな草刈り直後のタイミングだったとかで見ることができなかったという。刈り取った草の中に、ピンクの花が見えたと聞き、元気に自生していると胸をなで下ろした。

中国から渡来した「石竹」は「唐なでしこ」と呼ばれ、自生のものは「河原なでしこ」と言った。「大和なでしこ」と呼ばれるようになったのは平安時代以降らしい。「万葉集」には、なでしこが長歌も含め二十六首詠まれていて、その中に「石竹」と表記されているものもある。そのうち大伴家持の歌は十一首ある。自ら種を蒔き、育てるなどしている。

我が宿に 蒔きしなでしこ いつしかも 花に咲きなむ なそへつつ見む

大伴家持

清少納言は「枕草子」で「うつくしきものはなでしこの花」と一番に挙げている。「草の花はなでしこ 唐のはさらなり 大和のもいとめでたし」とも讃えている。

江戸時代には菊や朝顔と同じように広く鑑賞の対象になり、さまざまに品種改良された。しかし、動物による食害や外来種の影響などで今ではほぼ絶滅したと聞く。多摩市在住の友人によると、なでしこは五十年前までは多摩丘陵でもあちこちで普通に目にした。しかし、今では自生のなでしこはどこを歩いても目にすることはないという。